

教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の
状況の点検及び評価報告書
(平成25年度事業分)

庄内町教育委員会

平成26年9月

1 点検及び評価制度の概要

この報告書は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第27条第1項の規定により教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、これを議会に提出するとともに、公表しなければならないことに基づき作成するものである。

2 点検及び評価の手法

外部評価を行うこととし、下記の学識経験を有する者の知見の活用をするものとする。

第一次外部評価	学校教育	実務的専門家	鎌田 央	狩川東興野
	社会教育	実務的専門家	中里 健	鶴岡市宝町
第二次外部評価	総括	学問的専門家	和田 明子	東北公益文科大学

3 点検及び評価の対象

「平成25年度庄内町教育委員会の重点と視座」に基づいた学校教育と社会教育の「政策及び施策」レベルの事業

4 外部評価の内容

別紙報告書のとおり

平成 25 年度庄内町教育委員会外部評価報告書

和田 明子

本点検・評価は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、教育委員会の権限に属する事務の管理・執行の状況について点検・評価を行うものである。その具体的な方法は法定されていないが、庄内町教育委員会では学校教育と社会教育の分野に分け、それぞれの分野に知見を有する専門家が現場の状況を把握しながら点検・評価をする態勢をとっている。

本点検・評価は、PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルのうち「Check」を行うものであり、効果的な「Check」(点検・評価)のためにはまず「Plan」が適切に定められている必要がある。庄内町教育委員会では様々な「Plan」(「重点と視座」「重点」「基本方針と重点施策」「子ども像」など)が作成されており、それらの「Plan」を整理・統合し目標の明確化を図る必要があることを、昨年度までの点検・評価において繰り返し指摘してきた。

今回の点検・評価に当たってはそれらの指摘事項が一定程度改善され、平成 26 年度の「Plan」は従前よりは整理されたように見受けられる。平成 26 年度の PDCA サイクルは以前よりも効果的に運営されることが期待される。一方で、社会教育分野においては「庄内町教育委員会の重点と視座」と「庄内町社会教育の基本方針と重点施策」の関係が未だ明確ではないように見受けられる。また、平成 27 年度を目標年次とした「庄内町生涯学習推進基本計画」や「庄内町文化創造タウン構想」を今後どうする方針なのかも現時点では明確には見えない。

様々な「Plan」を廃止するだけでなく、教育委員会全体をカバーする計画、あるいはそれぞれのつながりを明確にした各種計画を新たに策定し明確な PDCA サイクルを確立することは、本点検・評価が始まって以来の課題であると思う。早急な実現を望みたい。

1 子ども一人一人を育む学びづくり

(1) 担任力向上研修と授業改善の推進

<自分なりの考えを持たせる授業づくり>

<学び伝え合い、人に役立つ授業づくり>

<学級づくりの充実>

<4～5名による少人数学び合い能力の向上>

<しっかりとした家庭学習習慣化（自学自習）>

○指導主事2人体制を生かし、担当校を決めて継続的に関わることにより、各校の課題や実践を的確に把握し、次につながる指導支援がなされ、授業改善・向上の原動力となっている。

○県教委事業等を積極的に受け入れることで、教職員の意識付け・意欲付けを図るとともに、研究や活動の裏づけとなる補助金を確保し、県教委指導主事や外部講師による助言の機会を拡充している。

○町教育研修所事業等との関連付けを図りながら、各校の授業改善・向上につながる研修の機会を工夫している。

◇担任力向上研修会①「教育活動全般に生徒指導を機能させる」

講師 国立教育政策研究所 統括研究官 藤平敦 氏

②「生徒指導の機能を生かした一人一人を大切にす授業の進め方」

講師 宮城教育大教職大学院 教授 相澤秀夫 氏

○各種研修を生かし、各校ともに一人一人に考えを持たせ、伝え合い、学び合う自校なりの工夫・実践が多く見られるようになった。

◇立川小…『夢をもって豊かにかかわり、自己の生き方をよりよくしていく子どもの育成』

- ・「生きる力」のもととなる「心のエネルギー」を育むことを目指し、道徳を窓口
に研究・実践。
- ・「心に響く道徳の時間の充実」と「他教科・領域・行事との関連づけ、地域素
材の取り上げ」の2つの視点に沿って道徳の学習過程を組み立て、実践を重
ねている。
- ・資料提示の方法を様々に工夫（ペープサイトの活用、ポスターのキャッチフレ
ーズの穴埋め、1枚の写真から考える等）して問題を意識化させ、ねらいとす
る価値へ向かわせる。
- ・子どもの周りにある地域素材を見直しながら、地域のゲストティーチャーの活
用を継続的に進めている。総合単元づくり等についても実践的に進めている。
《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「意欲的な学習」A・B評価 87% 「地域学習のよさ」
98%

保護者による評価…「学力をつける指導」A・B評価 94% 「地域を知る
学習」91%

◇余一小…『学び合うのが楽しい子どもの育成 ～友達の考えを受け止め、伝え合
いを通して高めあう姿を求めて～』

- ・「伝え合い」を問題解決過程における考え合い（集団思考）と規定し、子ども一人一人が課題を考えて解決するための手段として活用を図った。ペア→グループ→全体とステップを踏んで継続することにより、他者の考えを聞こうとする態度や自分の意見を伝えようと努力する態度が育っている。伝え合う必然性のある課題の設定、自分の考えを書かせる時間の確保、「学び合いカード」の活用等も、伝え合いへの意識や意欲を高める方策として機能している。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「勉強はよくわかる」 A・B評価 88% (H24 87%)

保護者による評価…「授業が分かる」 A・B評価 88% (H24 85%)

教職員による評価…「(1年生でも)友達と関わりながら学習することが日常化
している」

◇余二小…『響き合いながら学ぶ子ども～他者との関わりの中で考え、生み出す～』

- ・道徳教育を窓口にした“響きあう学び”のための有効な手立てを、他教科にも転用・拡充しようとしている。
- ・3つの視点（「響き合う場をつくる単元構成の工夫」「表現・交流場面の工夫」「話し合いを充実させるための教師のコーディネート力の向上」）から研究実践を積み上げている。
- ・教科学習においても体験を取り入れた単元構成が工夫され、子どもの疑問や追究意欲を出発点にした学習が展開されるようになってきた。ペアやグループでの交流形態を取り入れた授業は日常化してきている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「勉強が分かる」A・B評価 87% (H24 90%)

保護者による評価…「学習内容が身についている」A・B評価 76% (H
24 73%)

◇余三小…『自分の考えを伝え合う子どもの育成』・話し合う目的をはっきりさせた
授業「論点設定コース」「発展コース（論点なしの双方向的な話し合い）」
の設定。

- ・一人一人のレベルアップに向けた一人学び・ペア学習・グループ学習の使い分け。
- ・「聞く・待つ・つなぐ・もどす」を基本にした、話し合い活動における教師の支援の工夫。
- ・中学校教師（酒田市立第四中学校 高橋健教頭）を講師にした「単元を貫く言語活動」についての研修→国語科に取り入れて授業実践。

《2学期学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「分かるまで教えてくれる」A・B評価 97% (H24 99%)
保護者による評価…「基礎的な学力をつける努力」A・B評価 97% (H24 99%)

◇余四小…『「学ぶ」たのしさ、「わかる」喜びを実感できる授業づくり』

- ・外部講師（東京都小金井市立第三小学校 算数科特別講師 森川みや子氏）を招聘し、研究授業の事前・事後指導をもとに、「課題作り」「課題解決」「まとめ・練習」の各段階で算数科の授業づくりのポイントを明確化。
- ・教材重視、体験重視の教科のおもしろさにふれることができる授業づくり。

《2学期学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「好きな授業がある」95%

保護者による評価…「丁寧な指導（授業）」94%

教師の評価…「算数の学び方が分かり、たのしく意欲的に取り組む子どもの姿が見られる」

◇立川中…『主体的に学びを拓く生徒の育成 意欲をもって生き生きと学べる授業づくり～高め合う授業を目指して～』

- ・「高め合いのある授業づくり～学習過程、授業展開」「授業を支える力を育てる日常の取り組み」「生徒と共有する学校研究」の3点から授業の改善・充実を図った。
- ・「高め合い」「練り合い」のための学習形態の工夫、協同学習の手法を取り入れた学習活動、生徒の発言や作品を活用した学習活動が、全教科で多く取り入れられるようになった。
- ・これまでの活動をさらに活性化させ、日常的な実践にしている。
「授業を支える力」を育てる取り組み…チャレンジタイム（朝学習）、授業強調週間等「表現力」を育てる取り組み…ステップアップシート、「3のつく日」等「関わり合い」を育てる取り組み…学級づくり、生徒会活動。
- ・授業における課題を生徒と共有し、生徒の評価を取り入れながら授業改善を進めることにより、教師・生徒の双方の意識化が図られ、主体的な取り組みにつながっている。

《学校評価アンケート結果より》 保護者によるA・Bの評価

「協力すること・自主的に行動することができている」89%

「授業の基本的な内容が身についている」75% 「意欲的に授業に臨んでいる」74%

◇余目中…『自ら学び、伝え合い学び合うことのできる生徒の育成』

- ・4つの視点（「意欲・自立した学び」「表現・言語力」「関わり」「人間関係づくり・心情的成長」）からなる目指す生徒像をもとに、教科の重点項目を設定。具体的実践を積み上げることにより、教師の授業力の向上と伝え合う授業への改善が図られた。
- ・教科部会を主体にして、教科の特性を生かした学力向上の取り組みを進めている。

- ・道徳については学年主体で取り組み、外部講師（宮教大教職大学院教授 相澤秀夫氏）を招いて研究を深めた。
- ・教科・学年の枠を超えたテーマ（視点）別の研修会を実施。3年間を見通して共通スタンスで行うべきことや、どの教科・領域でも必要な学習スキル等を確認した。

《学校評価アンケート結果より》

保護者による評価…「授業はわかりやすく行われている」A・B評価 89%

- 家庭学習の習慣化については、町内小中学校共通の課題である。学年や教科によってバラツキが出たり、学習課題がやや形骸化したりしがちである。学年が進むにつれて家庭学習への取り組みが低下しがちな側面もある。家庭学習の目的をできるだけ一本化し、全校で積み上げていく体制をより強化していく必要がある。
- 家庭学習の習慣化については、主体的な学習や習熟・学力向上の観点から重要な問題と捉え、意欲づけを図ったり課題を工夫したりしている学校がある。
 - ◇余四小…課題作り・課題解決・練習の3段階からなる「単元づくりのポイント」を明確にし、楽しく学ぶための単元構成を工夫。「練習」段階に「家庭学習との関連」を位置づけ、系統性を意識した授業づくりを進めている。
 - ◇余三小…ドリル中心から脱却。授業での学習の応用・発展型の家庭学習を多く取り入れ始めた。
 - ◇立川中…「主体的に学びを拓く生徒」の具体的な姿として「新たな課題を見つけ自発的に取り組む」「習得した知識、技能、技術をその後の生活に生かそうとする」「家庭学習で自ら課題を見つけ、発展・応用的なことに取り組む」を明示し、各教科で働きかけを工夫している。
- 授業との関連づけ（意欲づけや補充的内容・発展的内容など課題の工夫、家庭学習を授業に生かす工夫等）を意識してさらに働きかけを工夫し、まずは学習内容の充実を図りたい。
- 家庭学習の充実や習慣化は、帰宅後の時間の使い方（スポ小や部活動の練習時間、メディア、生活リズム等）や家庭の教育力等にも関わってくる複合的な課題である。保護者・家庭への支援や啓発、具体的な活動を仕組んでの協力依頼等を行いながら、子どもの学習意欲や学習環境を高める連携体制を作りたい。
- 児童生徒の意識や家庭の教育力を高めることをねらい、様々な取り組みを行っている。
 - ◇立川小
 - ・保護者の教育力を高めることをねらい、「教育の日」の設定、孫親学級の実施、高学年を対象にした3者面談の実施などを行っている。
 - ・「平日のゲーム60分以上の人数」を減らすことを目的に、『アウトメディア』という取り組みを実施。子どもへの指導とともに保護者への働きかけを行い、前年度に比して大幅な人数減という結果が得られた。（1回目：26人 2回目：17人）次年度は資料を基にした学級活動での事前指導や、PTAでの重点化や広報での特集化も検討している。

- ・家庭の教育力向上を図る研修の機会として、外部講師を招聘しての親子研修を実施。次年度は高学年親子で情報モラルに関する研修を計画している。

(2) 特別支援教育、教育相談・就学指導体制づくり

<町特別支援講師配置事業>

○立川小と余二小に町特別支援講師を配置。

- 校長の明確な経営方針のもと、配置講師のより有効な活用を図りたい。併せて、特別支援教育コーディネーターの機能を活性化させ、学校全体の支援体制の充実を図りたい。

<特別支援教育研修会>

○担当者の指導力の向上とともに、教員一人一人の特別支援教育についての理解を深める場として位置づけ、活用を図っている。

○町教育研修所の特別支援教育部を中核に、「特別支援教育を生かした保育・授業づくり」をテーマに年4回研修会を実施。

①「本音でしゃべってみよう！解決のヒント」

子どもへの有効な支援方法、保護者への対応についての情報交換と協議。

②「自立に向けた学習・生活・進路指導について」

講師 天真学園高校学校生徒部長 大川恵美 氏 入試広報部長 小松好昭 氏

③課題別研修会「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」

講師 県教育センター特別支援教育課指導主事 齋藤真 氏

④「個別の教育支援計画について」

各園・校の様式と活用方法について紹介・意見交換 講師 本町教委指導主事 齋藤正典 氏

○保・幼・小・中の枠を超えて共に研修を進めたことにより、各段階の教育についての相互理解が深まった。発達の連続性を認識し、「先を見通した現段階の支援」の在り方を考える重要な機会となった。

- 当該園・校ごとに個別の教育支援計画が作成され活用が図られているが、子どもの育ちの連続性を意識した支援、園・小中学校間の連携という視点から、様式の改善や共通化についてさらに研究を進める必要がある。

<気になる子の訪問指導事業>

○アドバイザーとして木村伸子氏・宮河和子氏を幼・小に派遣。

○謝金等の減額により派遣回数は減ったが、その分自校で主体的にがんばろうという機運が高まり、活動や指導の充実に向けた自園・校としての提案や自助努力がなされ、それについてアドバイスをもらうという本来の形が進められた面もある。

- 次年度は、指導主事の仲介により県の「特別支援教育アシスト事業」（特別支援学校の専門教員の派遣）の活用も計画されており、更なる指導の充実を図りたい。

<教育相談専門員・教育相談員の配置事業>

- 立川中に1名の教育相談員（町・県兼務）、余目中に2名の教育相談員（県1名・1名）及び教育相談専門員1名（町）を配置。人的環境づくりという観点から教育相談体制が整備されている。
- 余目中では、「新たな不登校を出さない」ことを学校全体の課題ととらえ、学級担任・養護教諭・相談員との連携を強化。校長の主導で専門員も職員会議に参加する体制をつくり、情報を交換・共有することでよりの確な対応が検討され、全校体制で取り組んだ結果、不登校生徒数が減少した。
- 関係者の共通認識、役割分担、人材の有効活用という点でまだ課題が残る。
- <新教育相談体制「ほっと相談体制」>
- 余目中の教育相談室に「ほっとルーム」を開設。町教育相談専門員が常駐、生徒は休憩時間等に自由に来室し、雑談や相談を行っている。文字通り「ほっと」一息つく部屋として、生徒の心の開放や悩みへの早期対応等に機能している。
- 町内全園・小中校にチラシを配布、町教育相談専門員による電話相談、面談等についてPRを進めた結果、電話相談はほぼ毎日あり、急な相談要請にも対応できるようになってきている。
- 町内全園・小中校を対象に、園は年1回、小中校は年2回の定期訪問を実施。中学校の不登校の現状等を伝えながら、中学校単独の問題ではないという認識のもと、未然防止のための根源的な対策（各発達段階でなすべきこと、仲間づくり、自己決定の場を増やす等々）について共通の意識づけを図っている。

（3）児童会・生徒会自治活動の推進

- <町教育研修所専門部会「児童会・生徒会活動研修部」事業>
- リーダー研修会では小中児童生徒の混合グループを編成し、異学年交流を進めたことにより、双方にとって大きな刺激となった。
- 各校の児童会・生徒会のボランティア活動についての発表、今後の南三陸町の支援についての話し合い、「いじめのない学校づくり」に向けた意見交換等を通し、リーダーとしての認識が高まり、学校を変える役割を担っているという自覚が育まれている。また、自主活動・自治活動を通して集団の自浄力を高めていこうという共通認識が固まりつつある。
- 研修会に参加したリーダーらと他の児童生徒の認識や思いに格差があるのは当然のことである。オピニオンリーダーとして積極的に発信し、自校の活動を主導していくことを期待したい。また、全校児童生徒の意識を高め自治活動をより活性化していくために、町内全小中学校に「提言」を発信することや、各校共通して取り組める活動を工夫し提案していくことも有効であろう。それを支える基盤づくり（校長会での後押し等）も含めて、今後の検討課題としたい。
- 部会の中で、自校の児童会・生徒会活動の実践や成果と課題について報告し合い、自治活動をより充実させるための手立てや普及策等を検討する機会としている。また、研修所報「しょうない」にて各校の活動を紙面発表し、町内全教員への周知を

図りながら、子どもの主体性や自浄力、自尊感情等を育む在り方についての共通認識を図っている。

◇立川小・中…隣接校の利点を生かし、児童会・生徒会の役員が一緒になって挨拶運動を展開。校門～昇降口に並んで児童生徒を迎え挨拶を交し合うという小さな取り組みだが、両校児童生徒に新鮮な感動をもたらし、親近感を深めた。

◇余二小…児童会を中心に行う様々な縦割り交流活動により、学年間の交流が深まり、思いやりの心や感謝の心が育ってきている。「縦割り交流読み聞かせ」「なかよし遊び」「ひまわりチャレンジウォーク（全校縦割り遠足）」「なわとび練習」など。

◇余目中…生徒会執行部が、学校生活の母体である学級の雰囲気や級友同士の関わり方を温かく快いものにしようと、「Happy Action」という活動を仕組み、全校で取り組んだ。

- ・「声向き渡し」（プリント類を縦列で配るとき『はいどうぞ』『ありがとう』の一声かけ）や「Let' clap!」（よいことに盛大に拍手）
- ・発展活動として、文化祭期間中に各学級オリジナルのHappy Actionを展開。「握りこぶしでおはよう」「牛乳カンパイ」「練習終わりイエーイ」など中学生らしい発想の楽しい活動が自主的に展開された。

2 庄内町の気候風土、自然、社会、文化を学び、豊かな心を育む計画的な体験

(1) 交流の中で助け合い、支え合いの社会力を育む

<障がい理解と包括教育の推進>

○在籍する肢体不自由児童に対して全校体制で移動を介助。在籍学年を超えて関わる児童が多く、学校の中でその児童の存在が自然に受け入れられている。全校児童の心を育てる機会になっている。

○鶴岡養護学校との居住地交流を継続実施。

○立川地区の「あっとほ一む」、余目地区の「たんぽぽ」に通所する児童の母親たちが行事を企画し、中学校がそれに参加・協力する形で交流が行われている。

○町の中高小生ボランティアサークルに自主登録した生徒（立川中：14人 余目中：19人）らと障がいのある子どもたちとの交流では、積極的に関わろうとする姿、自らも楽しみながら状況に応じて関わり方を工夫しようとする姿が見られた。

●障がい理解や包括教育の推進は、教育の根源に関わる課題である。学校としてどう受け止め、目的化し、経営構想に組み入れていくかは今後の大きな課題である。その上で、総合学習等の内容の見直しや教育課程への位置づけを検討していく必要がある。

<異世代との交流体験>

○総合学習や学校行事など教育課程へ位置づけながら、各校独自の多様な活動が展開されている。地域の風土や文化が感じられる活動が多くあり、人との関わりを深めながら、子どもたちに「地域の人から温かく育てられている」という実感をもたらすものになっている。

◇立川小

- ・「読み聞かせボランティア」「図書館ボランティア」に父親の参加も呼びかけ、充実を図った。「お父さん」なりの味のある読み聞かせを子供たちは楽しんでる。
- ・同窓会の活動の一環として、「畑づくりプロジェクト」を企画。3年生が里芋や人参などの栽培を行い、芋煮を作って会食。栽培の苦労や喜びを体感することで、自ずと食への感謝の気持ちが育まれている。
- ・田んぼの先生の指導のもと実習田で稲作をし、約400kgの米を収穫。とれた米を南三陸町の名足小学校へ贈る他、田んぼの先生や保護者と共におにぎり会食を行っている。
- ・交通指導員や見守り隊、スクールバス関係者、読み聞かせボランティア、図書館応援団等を招き、1年間の感謝の気持ちを伝える「ありがとう集会」を開催。「子ども達が笑顔で元気に育ってくれることが喜び」「元気をもらっている」等の大人の気持ちを受け止める機会にもなった。双方の心の交流の場となっている。

◇余三小…庄内総合高校の「地域に開かれた学校づくり」に、近隣校として余三小が協力し、「連携授業」を開催。指導する・される双方が学ぶことが多く、共に楽しみながら交流を深めている。

体育：小3（45名）が高3スポーツ1選択生徒（28名）の指導で陸上・体操競技を体験。

商業：高校生の指導のもと、パソコンで「2分の1成人式」の文集を作成。

英語：児童生徒と一緒に英語学習。

◇余一幼…こま回し大会では地域指導者から教わったプロペラ回し、きのこ回し等の技を披露。お手玉・おはじき等の伝承遊び体験も楽しんだ。また、「地域の師匠」（地域ボランティア）の支援を受け、園の畑で園児がほうききびの苗植え、刈り取り、ほうき作りの一連の作業に取り組んだ。地域の伝統に触れる豊かな体験となった。

◇清川保育園…清川地区茶道教室2名を講師にお茶会を開催。園児が礼儀作法や日本文化の良さに触れる貴重な体験となった。

<被災地等との交流>

○各学校、児童生徒会、PTA、町等々がそれぞれにできることを考え、様々な復興支援活動や交流体験活動が企画、実施されている。それらの体験を通し、自らが考え主体的に活動することで得られる達成感、人のために動く体験で感得される喜びや自己肯定感や自己有用感、継続して行うことの重要性の認識など多くのことを学んでいる。人のために尽くす体験を重ねることで、感謝の気持ちや人を思いやる心が育ってきている。

○支援活動を継続していく中で、復興が進むにつれて必要される支援の内容が変化していることに気づき、元気や笑顔、『震災をわすれない』という心の支援についても考えるようになっていく。現地の人たちが今必要としていることは何かを

考え、支援活動や交流を通して現地の人たちと共に歩いていこうとする気持ちが育っている。

◇立川小…6年生の修学旅行で、南三陸町の伊里前小学校に間借りしている名足小学校との交流活動を実施。作品交換、ゲーム、記念写真撮影、募金活動で集めた義捐金（4万円）の贈呈等で交流を深めた。また、グラウンドに立ち並ぶプレハブで今なお続く避難所生活の様子や、南三陸ホテル副支配人の話などから被災地の現実を重く受け止め、支援の思いを強くした。また、同窓会とJAの田んぼの先生の指導のもと、児童が育てた新米を届ける活動も継続している。

◇余三小…6年生の修学旅行で、南三陸町の伊里前小学校と交流活動。仮設住宅住人より話を聞くなどして、「何があっても一生懸命生きる」「いつまでも応援する」等々の思いを深めた。

◇余目中

- ・複数教科で被災地と学習との関連付けを工夫した授業を実施した。技術科ではトマトやマリーゴールドの花を栽培し被災地に贈ることを決め、生徒らは良いものを作ろうと真剣に学び、一生懸命世話をし、立派な作物を贈ることができた。美術科では絵はがき作成、国語科では年賀状交流を行った。まさに今求められている「単元を貫く目標を持って学び、生活に役立つ、人や世の中に貢献する」学習が実践されたと言えよう。

- ・震災3年目となる今年、多くの生徒が震災を思い出すことがないと回答したアンケート結果を踏まえ、今年度の復興支援テーマを「震災をわすれない」と設定し、様々な活動を展開した。

- ① 震災を思い出す」活動…全校での震災や津波の映像視聴、震災関連資料の展示や応援ポスターの掲示を通して、震災の恐ろしさを再認識した。

- ② 被災者の気持ちを知る」活動…全校で被災者の書いた作文を読み、同世代の被災者が何を感じ、今どんな気持ちで生きているかを感じ取った。感想を書き、思いをより深めた。

- ③ 全校合唱『花は咲く』…震災を忘れない証として文化祭で全校合唱に取り組んだ。練習を重ね、当日は響ホールいっぱい全校生徒の合唱が響き渡り、感動とともに被災地支援の思いを新たにしました。

- ・野球部・ソフトボール部・サッカー部・吹奏楽部で部活動交流を実施。

◇町「希望の灯り」プロジェクト…町教育委員会の呼びかけのもと、余二小・余四小・立川中・余目中の児童生徒を中心に、町内の多くの子どもたちが牛乳パックの灯籠作りを行った。

◇庄内町野球連盟の主催で、庄内町・南三陸町中学校野球交流を実施。立川中・余目中・南三陸町の志津川中・戸倉中の4校が、学年ごとに試合を行った。皆で北月山荘に宿泊し、交流を深めた。

◇南三陸町で漁業体験交流…町P連の呼びかけで結成した「南三陸町応援漁業交流実行委員会」（余目中と立川小PTAが事務局）主催で実施。町内小中学生

親子66名が参加し、歌津伊里前漁港でワカメの種付け作業を行い、地元漁師らと交流した。

(2) 期待される地域の自然・社会体験活動

<ボランティア体験>

○多くの小学校で児童会を中心に空き缶やプルタブ、ペットボトルキャップの回収活動を継続的に展開し、目に見える形で寄託・寄贈につなげている。全校での小さな取り組みが継続することで大きな成果になることを実感し、次の活動への意欲づけ、主体的活動の基盤となっている。

◇毎年空き缶・プルタブ回収活動を行い、福祉施設へ車いすを寄贈。

立川小：山水園へ 余一小：徳州苑へ 余二小：ソーラーナへ

◇余一小・余二小・余三小…ペットボトルキャップの回収活動を行い、今年度は67,500個を山形銀行余目支店に寄託。当行のキャップの売却益で発展途上国へポリオワクチンを贈る運動に協力し、83人分のワクチンに相当する分を回収した。

○町の中高生ボランティア募集に、立川中14人、余目中19人が自主的に登録、庄内総合高等の高校生21人と共に様々な活動を行っている。諸活動を通して、まず自らが活動を楽しむこと、心の壁を作らず自然且つ能動的に関わること、相手や場の雰囲気に応じて自らの関わり方を考えることの大切さなどを学んでいる。

<子どもたちが地域の一員として役割を果たす体験活動>

○多くの学校で福祉施設の訪問・交流や幼稚園との交流活動等を実施。それらの体験を通して、多様な人の存在を認識し、関わり方を学び、地域の一員としてできることを考えながら、自己の生き方を見つめる機会となっている。

◇余目中…1学年において福祉施設訪問・介護体験の事前学習を実施。町福祉センター職員と町内福祉施設職員を講師に招き、庄内町の高齢化の現状や高齢者に接するときの心構え等を学んだ。また、生徒らがアイディアを出し合って、ダンス・縄跳び・折り紙・合唱等を企画・発表し、施設利用者から喜ばれた。「自ら積極的に活動すれば大変に思われることも楽しくできる」「交流するには相手の立場に立って考えることが必要」「考えていた以上に笑顔は大切」等々の実感的な感想が多く語られた。地域社会の中で人と関わりながら学ぶことの大切さを実証した活動となった。

3 地域の学校として特色ある学校づくりのマネジメント推進

(1) 庄内町の気候、風土、歴史、文化を学び、すりこむ手法の重視

○自校としての明確なねらいのもと、学校ごとに町の自然や施設を活用する様々な学校行事(校外活動)を工夫し、教育課程に位置づけている。子どもたちは体験活動を楽しみながら、この地域に生まれ育った喜びを実感している。また、地域の大人との関わりを通して、身の回りにいる人材の存在に気づいたり、大人に大切にされている自分を再認識したりする機会となっている。

- ◇立川小…3・4学年でスキー教室を実施。学校の要請に応じ、児童数（70名）の半数近い保護者や地域の協力者（30名）が参加、きめ細かい指導・支援を得ることができた。地元ならではの冬の戸外活動を存分に楽しんだ参加児童全てから、「またやりたい」の声が上がった。
- 小・中学校共に「総合的な学習の時間」に地域学習を位置づけている。地域の自然、歴史や文化、産業等を学ぶ学習や体験学習、地域の施設や人々との交流学习など、内容と系統性を工夫しながら、地域に目を向け、社会性のスキルを高め、自己の生き方を見つめるものになっている。
- 学校の節目に合わせて、地域学習を取り入れ、発表活動等を行っている。
 - ◇余三小…創立50周年記念式典に向け、「昔の学校」調べや学区探索などを行い、学校自慢やお気に入りの場所などを授業で取り上げた。また式典当日は、学校伝統のソーラン節やスクールバンド演奏を地域住民に披露し、喝采を浴びた。
- ◇立川中…学校統合40周年記念式典に合わせ、「足元を見据える」という観点から、清河八郎の調べ学習を実施。「文武両道」の精神が地域の人々の心に受け継がれ、学校精神の基底になっていることを知り、彼の生き方から多くを学ぶ機会となった。

（2）施設・行事を活用した教育活動の推進

- 本町への新入教職員を対象に実施する「町巡り」研修に参加したり、子どもと共に地域学習を進めたりしていく中で、学校と地域との関わりを実感し、「地域に生きる」「地域を担う」という観点から子ども育んでいこうという姿勢が、教職員に広がり始めている。町の史跡や施設を積極的に活用し、町や地域の行事にもできるだけ子どもの参加を図ろうと努力している。
 - ◇余二小…地域の史跡等を歩いて学習する「ひまわりチャレンジウォーク」を開催。区内の史跡や文化財にはクイズが設けられ、児童らは案内板等を読みながら回答する。学区を一回りする8kmのコースを歩きながら、楽しみながら史跡等を学ぶことができた。
 - ◇町の「新春を祝う会」で小中高の代表児童生徒（余一小6年生・立川中2年生・庄総高3年生）が『新年を迎え、がんばりたいこと』をテーマに意見発表を行った。ステージ発表では、立川小金管バンドが演奏を披露。自分たちの意見や活動が温かく、真摯に受け止められていることを実感し、自己存在感や達成感を味わう絶好の機会となった。
- 地域や教委の求めに応じるというだけでなく、学校としてその意義や教育的効果を実感したことにより、教科の学習や総合的な学習、学校行事において多様な要素が盛り込まれ、より豊かな学習が展開されている。
- 一方で、目当てや重点が広がり過ぎて焦点化できにくくなっている側面はないか。学力向上、学び合い・伝え合い、地域素材の活用、交流学习等々いずれも大切な視

点だが、それゆえに重点化・焦点化し、子どもたちが一つのことに時間をかけてじっくり取り組めるよう配慮することも必要であろう。

- また、保護者、公民館や地域団体との連携をより進め、子どもを取り巻く教育環境を豊かにしていくためにどこで誰がどう関わるか、どんなことができるかなどを話し合い、役割分担を進めていくことが求められる。
- 教育長の構想のもと、教育委員会の教育課（総務・施設・学校教育係）と社会教育課が理念を共有しながら、学校と地区公民館、地域団体、保護者や地域住民が一体となった活動を展開し、教育環境づくり、地域づくりを進めようとしている。学校・家庭・地域の関わりや役割を明確にしていく一步として位置づけたい。

4 人間性の基礎を培う幼児教育の強化

(1) 特色ある園づくりに向け、経営研修の推進

<地域の力を生かした園経営>

○どの園においても、年間を通して保護者による絵本ボランティアや園行事ボランティアの活動が展開されている。その中で園運営への理解が深められ、園と保護者との間に温かな協力関係ができてきた。また、自然発生的にボランティア保護者同士の交流も生まれ、横のつながりが広がりつつある。

○ほとんどの園において地域との交流活動は定着してきている。祖父母や地域住民、地域団体や福祉施設などの多様な協力を得て、園児は豊かな体験をすることができている。また、様々な交流活動を通して、心の通い合いや関わり合いを学ぶことができた。

◇狩川幼

- ・園側からの声かけで、年長児保護者5名による絵本ボランティアが協力。会を追う毎に次回を楽しみにしてくれるようになった。気分転換になってよいうという声も寄せられている。
- ・「地区公民館祭」への園児の作品出展2年目。今年度は年長児が地域の先生からちぎり絵の指導を受けて作品を仕上げ、展示。地域に根ざした活動になりつつある。
- ・地域指導者の協力を得て、畑の活動や凧づくりなど豊かな体験をすることができた。様々な面で地域との交流がなされ、定着しつつある。

◇余一幼

- ・絵本ボランティアは、園と一体となって自主的活動を展開している。活動後のボランティア同士の懇談や交流も充実してきている。
- ・「地域の師匠チーム」（地域ボランティア）の指導・協力を得て、餅つき、豆まき、こま回し、笹巻き作り、草団子作り、ほうきづくり等々1年を通して多様な活動が展開され、園児は豊かな体験をすることができた。
- ・徳洲苑訪問や外国人との交流行事において様々な発表活動を行い、表現の楽しさや達成感を味わうことができた。

◇余二幼

- ・絵本ボランティア、クッキングボランティア、引越しボランティアなど園のスムーズな運営につながる様々な協力を得ている。園に親しみをもってもらえる機会ともなった。
- ・幼稚園から地域に積極的に関わる一策として、ごみ拾いなど園児ができるボランティア活動を行っている。継続・定着を図りたい。

◇余三幼

- ・お母さん文庫、絵本ボランティアはボランティアの保護者と園児双方に好評で、読み聞かせを共に楽しむ時間となっている。呼びかけを地域にも広げていくことを検討している。
- ・畑のボランティアは継続するにつれて内容が充実してきている。

◇余四幼

- ・保護者による行事ボランティアを始めて3年目。正規職員3名の少ない職員体制の中、連携しながら園経営がなされている。
- ・地域の幼稚園として、地域に目を向け、地域を知り、地域住民と触れ合う活動を積極的に推し進めている。
- ・幼稚園を支える地域有志で構成された『和合めんごの会』や地域住民の協力を得て、多彩な活動が展開されている。（余四公運営協議会・和合地域作り会議への職員の参加、地区運動会への参加、公民館祭への作品展示、資料館雛人形展への出品、ひまわりっこ交流、和合大学院交流など）

(2) カリキュラムづくりへの支援

<園での子育て相談支援工夫>

- 就労状況や家庭環境に応じて活用できる預かり保育は、保護者を支える大きな力となっている。園も保護者の要望に応じて、年度途中からの受け入れにも快く応じている。
- 預かり保育の利用人数の増加が著しく、降園後に3分の2の園児が残る園もある。年度途中からの申し込みも多い。途中利用の中には特別に配慮を必要とする園児もあり、預かり職員に戸惑いも。担任を中心とした正規職員の支援が必要な場面が多い。
- 預かり保育を含めた長時間（12時間）の園での生活は、園児にとって負荷が大きい。発達段階から4時間を念頭に置いて組まれている本来の幼稚園の教育活動が、見直しを迫られることにも。正規時間帯の活動に集中できない、気持ちが不安定で他児とのトラブルが増えた、気になる行動が起きている等々の実態も現れているようだ。保護者との話し合いを密にしながら、「預けて安心」に終始せず、園児を中核に置いて、よりよい環境づくりや関わり方を共に考えていく必要がある。
- 預かり保育職員と幼稚園職員との連絡体制を工夫するとともに、特に配慮を要する園児については、担任が具体的な支援の方向や方法を示していくことで、一日の支援が繋がっていくよう配慮している園が多い。

- 預かり保育に関わる職員が時間交代制で入れ替わるため、確実な引き継ぎが課題となっている。
 - 預かり保育への様々な要望に対応するため、幼稚園職員が動かざるを得ない現状がある。預かり保育担当者への週案の説明、緊急トラブルへの対応、預かり保育プログラムの検討、保護者への連絡・説明などに時間を取られることが多く、本来の業務（幼稚園職員の打ち合わせや翌日の保育の準備など）は勤務時間外に及ぶことも多い。預かり保育での有資格者の採用を図るとともに、幼稚園職員の勤務体制の改善・検討が求められる。
 - 様々な家庭事情を抱える園児が増加している現状を踏まえ、相談活動や個別の支援を充実させていく必要がある。
- 特別に配慮を必要とする園児については、「気になる子の訪問指導事業」のアドバイザーを活用して指導の充実を図っている。また、教育委員会や保健師、外部関係機関と連携し、対応していこうという動きがある。

◇狩川幼

- ・個々の悩みに応じられるよう、希望面談を含め個人面談を3回実施。
- ・保護者同士が話し合えるクラス懇談も開催。先輩ママからの情報やアドバイスが役立つことが多々あり、好評だった。

◇余一幼…保育参観の後に「すこやかトーク（子育て相談会）」を設定。様々な家庭事情を抱える園児が増えており、手厚い支援が求められている。

◇余二幼…保護者からの要望や相談には、職員の連携を密にしながら、担任が直接回答するようにしたことで、スピーディーな対応が図られ、担任への信頼も増している。

◇余三幼

- ・時間を惜しまずに、担任が丁寧に保護者の相談にのっている。
- ・多様な家庭事情や子育てに悩みを抱える保護者が増えている。機会をとらえて子育て相談をPRしながら、いつでも相談に応じる体制づくりに努めている。

◇余四幼

- ・保護者による行事ボランティアや保育参加、子育てトーク等の活動等を、子育て支援と絡ませながら、子どもの成長を感じ、子育ての楽しさを実感する体験になるよう配慮している。

5 命を育む教育活動の充実と推進

(1) 安全・安心な地域づくりの推進

<通学路安全対策協議会活動の充実>（通学路安全対策アドバイザー事業）

<様々な災害を想定した防災体制づくり>

○小学校の耐震工事の完了と併せて、災害対応訓練が充実してきたことで、保護者の「安全・安心な学校」という認識が高まっている。

○各学校において、地域や専門家の協力を得ながら、学区環境や学校の状況に即した安全学習を展開している。

◇立川小…学区に線路を抱える学校として、「列車による事故防止の学習」を実施。
東日本旅客鉄道株式会社仙台支社山形サポートセンターの助役2名を招聘し、
低・中・高学年別にクイズを取り入れた学習を展開。楽しみながら真剣に学習
することができた。

- 児童数の減少から、一人下校の集落も出ている。少子化や地域条件に対応した対応
について検討を進める必要がある。
- 小学校と隣接幼稚園との合同避難訓練が多く実施されている。また、小学校区の総
合防災訓練に園も参加し、有事の際の行動手順などについて相談しながら連携を進
めることができた。また、実際にメール配信を行い、安心安全メールを活用した災
害時の引渡し訓練を実施した園・小学校がある。
- 少ない職員による避難誘導をシュミレーションするとともに、職員の指示に従って
園児がきちんと行動できるようにするために、計画に基づいた月1回の避難訓練以
外にも、園児の避難の状況に即して、一日の様々な場面での訓練を実施し、非常事
態に備えている園がある。
- 毎金曜日の降園前に、交通安全の約束や不審者対応に関わる安全指導を繰り返し、
園児に意識付けを図っている園がある。

(2) 共に命をつなぎ合う絆、いじめを絶対許さない土壌づくり

(3) 自分を肯定する自尊心の向上

<よわい者や人の内なる心を思いやる教育活動の積極的な推進>

<南三陸町との継続的交流の充実>

○各園や小中学校において、「人の役に立つ・人のために尽くす」ことを重視した様々
な活動を展開し、心を育てている。自らが考え主体的に活動することで得られる達
成感、人のために動く喜びや自己肯定感や自己有用感、継続して行うことの重要性
の認識など多くのことを学んでいる。

○多様な交流活動を体験することで、感謝の気持ちや人を思いやる心、共に歩んでい
こうとする気持ちが育っている。

<いじめのない学校づくり推進事業（県委託事業）>

○県委託事業『いじめのない学校づくり推進事業』を受けて、昨年度から町内全小中
学校が取り組んできたが、その報告・発表も兼ねて、町教育研修所の教育講演会と
抱き合わせ、「いじめ防止シンポジウム in しょうない」を開催した。ノモ・ソリ
ューション代表の笹岡郁子氏を講師に「私が体験した！いじめ・キレる子どもの目
線、親が見落とす10代のSOS」と題した基調講演がなされた後、パネル・ディ
スカッションが行われた。町教育研修所運営委員長（余目中学校長）をコーディネ
ーターに、町校長会長（立川中学校長）、庄内警察署長、町P連会長、人権擁護委
員協議会庄内町部会長、地域住民代表者とともに、児童会・生徒会リーダー代表が
パネリストになり、取り組みを発表したり意見交換したりしながら意識を高め、「絶
対にいじめを許さない」という土壌づくりにつなげることができた。

6 人・物を大切にし、感謝する心を育む教育の充実

(1) 一人ひとりのよさ・得意を認め合う学級づくり

(2) 違いを尊重し許容する道徳教育の充実

○学級づくりの基底として全校での取り組みを推進し、子どもの心を育もうとしている学校が多い。自校の実情に即した独自の取り組みを工夫している。

◇立川小…「立川しぐさ」（にっこりしぐさ・あったかしぐさ・思いやりしぐさ）を全校で推進。ことばの浸透とともに、心の育成も図られている。

◇余一小…今年度のめざす子ども像の一つに「がんばっている友達が紹介できる子」を掲げ、全校で取り組んでいる。友達の頑張っている姿をよく見ようとするのが日常化されるとともに、学級の雰囲気や居心地がよくなってきている。

◇余二小・余四小…縦割り交流活動を充実・推進することで、互いを思いやる気持ちや助け合い・励まし合いの関係づくりを図っている。

◇余目中…学級の雰囲気や級友同士の関わり方の改善をねらい、「Happy Action」の生徒会活動に全校で取り組んだ。

※「1子ども一人一人を育む学びづくり」の「児童会・生徒会自治活動の推進」に詳細記載

7 教員の資質向上

(1) 研修所の研修と教育課題の共有化

○町の子どもの実態や課題を踏まえ、園・小中学校・公民館の職員が枠を超えて連携し、課題を共有し実践を交流し合いながら、指導力向上に直結する研修を積み上げている。

◇研究部

○「TT指導法研修会一庄内町方式を探って一」を開催。

○「一人一人を伸ばす」「確かな見取り」を重点にした余四小の算数の提案授業と、外部講師 小金井市立第三小学校の森川みや子氏の講話「楽しく一人一人を伸ばす算数の授業づくり」をもとに、「教材、体験、子どもの意欲」を重視した授業づくりについて研修を深め、授業改善・向上への指針となった。

◇幼小連携部

○「遊び」から「学び」へのつながりを重視しながら、「自主性」と「思いやり」を共通テーマに実践活動を推進。その実践を交流し学び合うことで、相互理解や連携が深まっている。

○25年度の取り組みを「幼少連携交流実践紹介」の冊子にまとめ、各園・小学校に2部ずつ配布。町としての幼少連携の計画づくりに向けた重要な資料となった。

◇小中連携部

○町内小中一貫教育の視点から、「立川スタンダード」「余目アソシエーション」の推進・確立に向け、実践の検証や普及策の検討を進めている。

○「小6・中1・中2連携プロジェクト」について、各校の実践事例を交流し検討しながら、25年度版の作成に取り組んでいる。

◇児童会・生徒会活動研究部

※「1 子ども一人一人を育む学びづくり」の「児童会・生徒会自治活動の推進」に記載

◇特別支援研究部

○「特別支援教育を生かした保育・授業づくり」を年間テーマに、年4回の研修会を実施。所員の特別支援教育に関する理解を深め、指導力の向上につなげることができた。

- ・「自立に向けた学習・生活・進路指導について」の研修。（講師：天真学園高等学校 生徒部長・入試広報部長）
- ・課題別研修会「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」（講師：県教育センター特別支援教育課 齋藤真指導主事）
- ・「個別の教育支援計画」の様式と活用方法について事例紹介・意見交換 など。

◇情報教育部

○各校にあるスカイメニューソフトの活用に向け、日情ソリューションズ公共システム営業課の社員を講師に、2回にわたり研修を深めた。

- ・「スカイメニューの効果的な使い方」についての研修。「SkyMenuPRO 13 支援ソフト」と「携帯電話の情報モラル指導教材研修セット」の各校への配布。
- ・「PC室授業支援ソフト『スカイメニュー』を活用しよう！」をテーマに実践研修。

○生徒指導と絡めて、余目一小の本間紳一教諭を講師に、情報モラルやネット対応について研修。

- ・「情報モラル～ネット社会の歩き方」をテーマに研修。
- ・資料の「余一小情報モラル指導計画平成25年度版」やデータは、各校での即時活用が可能で、実践の広がりが期待される。

<町教育研修所課題別研修会>

- ・合唱・学級経営講座…「授業や合唱を通して子どもをどう育てるか PART 2 ～男女の声の違い、心の成長過程を柱に～」
- ・情報モラル講座…「ラインの仕組みと危険性を考える」
- ・情報教育講座…「PC室授業支援ソフト『スカイメニュー』を活用しよう！」
- ・授業づくり講座…「体験・発見から学ぶ楽しい算数の授業」
- ・町内めぐり講座…「副読本で授業づくり 立川地域編」
- ・体育講座…「ヒップホップ」
- ・特別支援教育講座…「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」
- ・危機管理講座…「民間企業に学ぶ保護者対応！」
- ・学校事務部会…「情報処理データの共有作業」
- ・業務員・調理員部会…「芝刈機メンテナンス研修」

<町教育研修所教育講演会>

※「5 命を育む教育活動の充実と推進」の「共に命をつなぎ合う絆、いじめを絶対許さない土壌づくり」に記載

(2) より質の高い学級・教科担任力の育成

<担任力向上研修会>

※「1 子ども一人一人を育む学びづくり」の「担任力向上研修と授業改善の推進」に記載

8 学校教育施策・事業の総括

- 計画訪問と共に年度末経営訪問が実施された。各園・校の経営の重点と1年間の実践、成果と課題を把握するとともに、校長の思いを直に受け止める貴重な機会となった。年度初めと年度末の訪問を継続することで、各校の経営マネジメントをより意識づけ、さらなる経営の充実を図りたい。
また、各園・校の成果と課題に即し、指導の充実を図りたい。
- 指導主事の努力により、各園・校の実践と成果・課題が一覧的にまとめられ、さらに共通する成果や課題が洗い出された。教委としての事業総括・次年度の指導戦略等につなげたい。
- 教育委員会内部の異動に伴い、業務上の連絡が途切れることも懸念される。口頭連絡で済ませず、正式文書とは別に覚書的な形で必要事項を残す等の方策を検討したい。
- 教育長の指導の下、教育委員会教育課と社会教育課の連携強化の構想が進められている。共同的な事業の企画や推進とともに、両課のラフな話し合いの機会を設け、関わり合える部分を見つけ出したい。
- 指導主事2人体制を生かし、1名に指導主管的役割を担ってもらうことは可能か。教育長直属の役職として位置づけ、教育長の補佐的な立場で業務を進めることなどを検討したい。
- 「現場を知らない行政」を払拭したいという教育長の信念の下、各園・小中学校の入学式や卒業式に来賓クラスとは別に教育委員会職員の参列を図っている。園児や児童生徒、職員、保護者の様子を直に見たり、雰囲気を感じ取ったりする貴重な機会になっており、園・学校理解の重要な一助となっている。

1 はじめに

平成24年度の文部科学白書(25年7月発行)の「生涯学習の推進」を抜粋してみる。「生涯学習」とは、一般には人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられる。また、人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択し学ぶことができ、その成果が適切に評価される社会として「生涯学習社会」という言葉も用いられる。

社会教育とは、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動(体育及びレクリエーションの活動を含む)をいうと定義されている。具体的には、地域住民同士が学び合い、教え合う相互学習等を通じて、人々の教養の向上、健康の増進などを図り、人と人との絆を強くする役割を果たしています。これに加え、多様な学習活動を通じて、地域住民の自立に向けた意識「自助」を高めるとともに、学習活動の成果を協働による地域づくりの実践「互助・共助」に結び付けていく役割があります。

以上の観点から、生涯学習社会の構築に向けて、その中心的な役割を担う社会教育行政の今後の推進の在り方について方向性が示された。

(25年1月中教審生涯学習分科会)

その中に、近年の社会教育行政の課題が挙げられている。

- ・地域コミュニティの変質への対応(コミュニティ再生への対応が不十分)
- ・多様な主体による社会教育事業の展開への対応(様々な課題への対応が不十分)
- ・社会教育の専門的職員の役割の変化への対応(社会教育主事減少による十分な活動が困難)

庄内町教育委員会の社会教育行政の3年間を見てきて、はじめに挙げたい課題は、上記の通り、生涯学習と社会教育活動は、その理念とか概念といったものが違うように読み取れるが、庄内町の教育の目標・重点方針の中では、それらの言葉が混在していないか考察する必要がある。

また、「学校・家庭・地域をつなぐ庄内町の教育の重点」や「庄内町で目指す子どもの姿」といった教育目標は、庄内町生涯学習推進基本計画に沿って作成されているが、それを目指す視座というか、基本方針が、学校教育と社会教育で一致していない。学校教育では、それは単なる参考資料であるが、社会教育では、それそのものが、重点であり、施策方針となっている。

2 みんなが学び続ける生涯学習の推進

(1) 学習環境の整備と学習活動への支援

- ・高齢者事業として、栄寿大学、松寿大学があり、それぞれ特長的ではあるが、一方がリーダー育成の目的で地区からの推薦が必要であり、他方は、高齢者全員会員となる。誰でも、いつでも、自主的に参加という生涯学習の理念から考えると、検討する必要があるであろう。
- ・元気の出る地域づくりを応援します交付金 … 地域運動会、文化芸術祭などの地域づくり事業として、地域が自ら考え、自ら行う住民自治活動を支援するためという。これをまた、公民館事業の交付金化の推進へ繋げるといふ。将来的には、公民館運営事業そのものも、住民自治活動に移行するのか、説明が必要である。
- ・生涯学習事業 … 四公のひまわりっ子広場、おやこ元気塾、町民大学歴史民俗部、和合大学院、狩川公の風っ子広場、松寿大学、やまゆりスクール、IT講習、趣味講座、など住民のニーズに合った企画をすれば、参加者は集まる。しかし、住民のライフスタイルの多様化に伴い、学習ニーズに対応できる専門的職員の養成も必要になっている。好評な事業は継続していきたい。

(2) 住民主体の公民館運営

- ・公民館は、地域住民にとって最も身近な学習拠点であるだけでなく、交流の場として必要な役割を果たしている。庄内町の7つの公民館は、他町に例のない、それぞれの特徴を持つ公民館になっている。映像文化を柱に、陶芸文化活動の拠点として、PC技術普及を中心として、「和合の里」地域の絆、地域コミュニティづくりをめざす公民館、歴史と伝統を生かして、生きがいつくり、自治意識の向上をめざす公民館、地域に伝わる民俗芸能の伝承を大事にしている地域、自然や森林を活用しての人的交流を図り、地域の活性化に取り組む公民館といった、「社会が人を育み、人が社会をつくる」公民館として、学校と並ぶ地域コミュニティの拠点となりつつある。

(3) 青少年・家庭教育の充実

- ・小学生国内交流事業は、南三陸町と庄内町の子どもたちが、互いの交流活動を通して、両町の自然、文化、風土に触れ合い、親睦を深めることは、将来に生きる貴重な体験

である。

- ・成人式開催事業 … 80%の参加率は良好と思われる。内容的には、他町の情報を参考にして、実行委員会が、自主的、主体的になればよい。
- ・家庭教育講座 … てっとり早く講演会というのではなく、参加者が、主体的に、わが家の場合は、こうなんですと、自由に話せる座談会も、面白いかも知れません。
- ・青少年ボランティア育成事業 … 中高生のボランティア意識がまだまだ低く、参加者も少ない。しかし、スキルアップ講座は継続したほうがよい。
- ・大中島自然ふれあい館「森森」事業 … 他市町からの利用者が増加し、2700人の利用を見る。活動メニューの多様化を考えて継続したい。
- ・森森自然塾 … 外部指導者によらず、野外活動指導員が中心となって開催。49名参加。今後、地元住民も巻き込んで実施したい。
- ・JrカレッジWAGO … 住民のライフスタイルの多様化により、参加者減少。
- ・狩川公 … ワンパク学園（ねむり流し、魚釣りなどの野外活動）7回、203人参加、郷土愛と仲間づくりを高める役割を果たしている。

（4）読書環境づくりと支援

- ・小中学校図書館蔵書検索端末の接続活用は中止
- ・子ども読書活動の推進 … 学校、地域、家庭と連携しながら、継続推進活動に努めている。目標は、家庭での読書習慣化をめざしたい。
- ・読書感想文コンクール事業 … 59作品応募、23点が特選、田川地区入選1点、感想文は、単なる作文指導とはいかず、独自の書き方がある。先生方の指導研修を企画し、レベル向上をめざしたい。よい感想文は、どういうものか、県、全国の特選作品を読んだだけでもわかる。
- ・読み聞かせ事業 … 幼、小学校、家庭と連携し、サークルおはなし会を中心に10回開催、参加者の真剣に聞く表情が印象に残る。
- ・町民大学文学部 … 年5回開催、「郷土の人物に学ぶ」をテーマに開催したが、参加者が予想よりも少ない。内容を精査して、来年度につなげたい。
- ・絵本はともだち事業 … 土田義晴氏との交流は長く続いている。原画展の見学者も多くあり、「ワークショップ」も好評であり、継続したい。

3 地域に根ざした文化の振興

（1）文化創造館の充実

- ・響ホール事業推進協議会補助金・芸術祭実行委員会交付金

芸術祭は、町民の創作活動の発表の場であり、多くの町民の関わりがあればあるほど、町の活性化と町民の生きがいづくりにも通じる。そのためには、実行委員会の自主事業の企画運営並びに、町民による企画支援を続けたい。また、アシスタントエンジニアの育成、企画プロデューサーの育成も強化したい。

(2) 文化芸術活動に親しめる環境づくりの推進

- ・文化財巡りツアー … 庄内町内、3コースの見学コースあり、7名と参加者少なし。高齢化。目先を変えて、関心を高める工夫が必要と思われる。
- ・民俗芸能保存伝承協議会補助金 … 保存会26件、少子化により後継者不足であるが、積極的な支援体制で大事にしていきたい。
- ・ふるさと庄内塾 … 5団体、子どもに伝承、ふるさとの伝統を守り継ぐこと大事にしたい。

(3) 文化財愛護思想の普及と人材育成の推進

(4) 歴史民俗資料の収集保存と資料館の充実

- ・亀ノ尾の里資料館運営事業 … 8回企画展実施、入館者2070人、歴史民俗に関心のある人のニーズに応える企画運営を心がけ、内容が貴重である。
- ・歴史民俗資料館運営事業 … 7・8月のみの開館、来館者200人、今後、いかに整理統合するか検討する必要がある。

(5) 水彩画記念館と公募展の充実

- ・内藤秀因水彩画記念館運営事業 … 企画展7回、展示替え5回、来館者4596人。考慮されたテーマ設定の企画展は、関心のある者にとっては、魅力的なものだった。また、展示替も、時期とモチーフを考えて適切な設定になっていた。
- ・内藤秀因水彩画公募展開催事業 … 1347作品の応募があった。水彩画だけの公募展はあまりないので、応募拡大のためのPRを強化したい。あわせて、展示会のPRも。

4 健康と生きがいを支えるスポーツの推進

(1) 生涯スポーツの推進

- ・ひまわりマラソン大会開催 … 727人の参加、町民の健康づくり、体力増進のために、幼児から高齢者まで、だれでも参加できる魅力あるコース設定につとめた。
- ・スポレク i n 庄内 … 誰でも、気軽に楽しめる軽スポーツ・レクリエーションの実施、104人の参加、参加者の交流を意図的に図った。

(2) 競技スポーツの推進

- ・町民ゴルフ大会実行委員会助成金 … 126人参加

(3) 体育スポーツ推進体制の整備充実

- ・体育協会補助金330万
- ・中学校運動部活動地域指導者支援事業 … 35名 依頼する際、指導者、学校、地教委の的確な、趣旨説明や意思疎通を徹底することが大切。

(4) 総合型地域スポーツクラブへの支援

(5) 八幡スポーツ公園構想の推進

5 終わりに

社会教育事業の効果や効率を評価する場合、次の3つの視点が必要といわれる。①事業の量的効果、効率に対する評価。予定した人数に対する参加した人数で示す。ただし、計画段階での確かな参加予定人員の推定をしたか。適切な広報活動を行ったか。参加者の要望を計画に取り入れたか。が重要になる。②事業の質的効果・効率に対する評価。その事業に参加した住民の満足度で示される。事業前の期待値に比して行うもの。③事業の費用効果・効率に対する評価。当該事業の実施に要した経費に対する事業効果の比をもって示す。

このことは、一つの指標として参考とし、このことをそのまま実施すべしとは考えていない。